

囲碁・将棋の効用



この文章は、平成 25 年 1 月に発表したものに平成 28 年、加筆訂正いたしました。

現在、ライトスタッフでは将棋は扱わず、囲碁を深く追及しています。

ライトスタッフで囲碁・将棋をカリキュラムに採り入れていることにはもちろん根拠があります。

その大前提にあるのは、

- 髓鞘化現象 . . . 脳内の配線作業は、ほとんどが9歳までに完了してしまうこと。
- 知能の転移 . . . 他の題材で身に付けた考え方は、題材が変わっても応用できること。

ということになります。

ギルフォード博士の知能構造論のうち、「はたらき」の分野に関しても、

- 認知 = 今の局面を理解する。
- 記憶 = 定石・定跡を利用できる場面では利用する。
囲碁の基本の死活、将棋の基本の詰めは覚えてしまう。
- 拡散思考 = 普通の手では局面を打開できない時は、まったく違う発想で考えてみる。
- 集中思考 = 詰め碁や詰め将棋と言われる場面。
「正解」があり、正しい手順を積み重ねれば必ず望む結果が得られる。
- 評価 = 判断する。まさに最初から最後までこの作業の連続です。

これらすべての能力をフルに活用しながら勝利を目指すので、バランスよくすべての働きを鍛えるには打ってつけの課題です。

ただ、「領域」に関しては、完全に図形の分野ということになります。

そのため、あくまでも

記号 . . . 教室における記号領域のペーパー課題 + 計算ゲームやアルゴ、算数のテキスト
算数の宿題や賢くなるパズル・アルゴ問題集

概念・行動 . . . 教室におけるペーパー課題 +

も十分に行っている上での囲碁・将棋の位置づけということです。

しかし、上に挙げました「知能の転移」という現象がありますので、たとえば囲碁・将棋で「自分の足元を固めないで攻めだけを考えていたら最後に痛いしっぺ返しを食らう」ということを覚えたなら、それは学生時代には勉強の仕方、社会人になったら人生設計、経営者になったとしたら経営そのものという「概念」分野でもその考え方を応用できるようになります。

例えば将棋を通して経験できる考え方として、駒一つ一つの個性を理解して、うまく組み合わせて使いこなす、ということがあります。



「金」と「銀」では、通常は「金」の方が価値が高いのですが、最後の最後の場面では、「今本当に必要な駒は銀」ということが起きたりします。また、本来価値の高いはずの「角」を相手に差し出して、「桂馬」を手に入れたい場面、というのも生じます。そして、一番弱くて数も多く、普段は軽く扱っている「歩」も、うまく働き場所を与えてあげれば「と金」に変身して大活躍します。

これらを上手く使いこなす能力は、将来リーダーとして人の上に立った時に要求される能力ではないでしょうか？

それを髄鞘化の終わっていない9歳までに経験できることは大きいと思います。

その他身につく大事な考え方の例を以下に挙げてみます。

囲碁・将棋共通の考え方もたくさんありますが、ここでは囲碁を題材にしてみましょう。

◎ 優先順位を常に意識する。

気になるところ、手を打ちたいところはたくさんあっても、どこが最優先なのかを常に考える。

◎ あちこちほころびがあるのに手を拵げすぎると、最後に破たんする。

しかし、最初からこじんまり打つと、広いところを相手にとられる。

「根拠」を築きながら、少しずつ陣地を拵げて行く。

または、敵の中に飛び込んでも確実に生き残れる見通しを立ててから飛び込む。

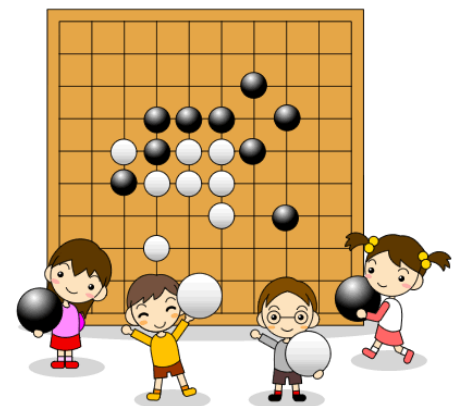
◎ もう無理だと分かったところはあきらめて、違うところに活路を求める。

助からない石にこだわると、被害が大きくなる。

◎ 心配だけれど、放っておいても実は大丈夫なところ、を見極める。

心配だから、と手を入れると、結果的に自分が損をする。

◎ 敵の急所は我が急所。「相手は何をしたいのか」を常に読むことが大事。



- ◎ 石の効率をよくする。一つの石にいろいろな役割を持たせる。一石二鳥を狙う。
- ◎ 定石だけに頼ると失敗する。
部分的には定石が使えるとしても、周囲の石の形によっては大失敗となる。
- ◎ そのまま行けば負けるのであれば、一か八かの勝負を仕掛けなければいけないこともある。

囲碁・将棋の宿題について

年長または1年生からは、囲碁・将棋の宿題を出しています。

これは、3年生以降本格的に中学受験の勉強を始めるにあたって、とても大事な予行演習になっているのです。

問題集を宿題にする場合、解答も次のページに載っています。まずは答を見ずに自分で考えて、解答をチェックする。間違えたのであれば解説をよく読んで理解する。そして後日もう一度答を見ずにやってみる。

「説明をよく読んでみる」が宿題の場合は、自分が本当に納得行くまで読み込んでくる。

初期の頃はこうなります。

そもそも全くやっていない

→ テキストに載っている、典型的なひっかけ誤答例をそのまま答える。

問題集を流し読みしただけ

→ 分かったつもりが、テストでは全然できない。

「はい、この意味を説明して。」と言われるとできない。

問題集の答を丸暗記

→ 記号選択問題を自由記述に変えられただけで出来ない。

正解だけではなく、理由も書きなさい、とされると書けない。

問題図を左右入れ替えられただけで出来ない。意味が分かっていたら出来るはず。

一番ヒドイ場合、違う問題の答を書いても気付かない。

こうしたことを経験しながら、「本当に宿題をきちんとやる」とはどういうことか、中学受験勉強を始める前に分かって欲しいのです。

私が家庭教師をやっていた頃、大手塾へ行きながら成績が落ち続けている子は100%と言って良いほど、塾から指示された宿題をちゃんとやっていないだけ、でした。解答を丸写しして提出し、「未提出」はまめかれる。漢字や慣用句も、一度さらっと流し読みして「やった。」と言う。しかし、確認テストはできない。しかし、それを省みずに



次の単元へ進んでしまう。だから、次の単元も理解できない。

ライトスタッフでは、囲碁・将棋の宿題は不合格になると、再テスト + 新規の宿題 となります。それを一度気合いを入れて消化していかないと、テストされる範囲が3週分、4週分、とたまって行きます。過去に何度か、「うちは囲碁・将棋の宿題要りませんから無くしてください。」とご家庭から頼まれたことがあります、「この程度の宿題がこなせないのなら、中学受験なんて無理ですよ。覚悟を決めて、たまった未消化分を消化するよう励ましてあげてください。」とお答えしています。

たかが 囲碁・将棋 されど 囲碁・将棋。「勉強するとはどういうことか」を教えてくれる、大切な教材です。

子ども囲碁教室について

2012年、私は大人用・子供用合わせて6か所の囲碁教室に見学・体験に行っていました。

子供用教室で感じたことは、「子どもは楽しいのが一番」を優先しすぎているなあ、ということでした。学校の出来事を雑談しながら打っている子、与えられたペーパーの問題を全然解かずにおしゃべりしている子。よそ見をしていて自分の番に気付かない子。

ただただ何となく打って、勝った負けたを先生に報告する。局後に検討をしないので、何度も同じ形になって負け続けている子もいる。でもたしかに楽しそう。

どの先生方にうかがっても、「いや、子供はこれでいいんですよ。」とのことでした。たくさん打っているうちに覚えて行く。理屈を説明してもどうせ分かりませんから、と。

私が見学したのはプロ志望の子どもさん=院生 たちではありませんので、入門用の教室ばかりを見学してすべての教室を意味がない、と決めつけるのは早計だと思います。

しかし、これらの方針にも理解できる面はありまして、一般的に囲碁の入門教室に来られて、ルールを理解して入門から本コースに継続するお子さんは2割ほど、だそうです。8割の子は「わけわからん」とやめて行く、と。

ライトスタッフの場合、入会テストをクリアされ、考えるトレーニングを積んでいる生徒さんばかりですので、「理屈で考え」、「失敗の原因を分析して次に活かす」指導法は、囲碁・将棋を問わずできると考えております。そして、その方が面白い、と。

なお、大人用教室での出来事を一つ。

インストラクターの先生に指導碁を打っていただく際、「いや、それは定石ではありえません。」「これが定石です。」とさんざん私の手にダメ出しをされました。私の意図を説明して、「この先こうするつもりなのですが。」と言ってもけんもほろろ。

ところが、帰りの電車の中で囲碁の教科書を読んでいると同じ場面が出てきておまして、「部分的には〇〇が定石だけれど、この場面ではすぐ近くに味方の石があるので、××に打つのが最強の一手です。」と書いてありました。経験豊富なインストラクターさんは定石にとらわれすぎていて、経験が少なくその場で真剣に考えた私の手の方が実は正解だったということですね。